

2003 年 9 月 28 日 於東京外語大本郷サテライト

「イラク戦争後の世界—アメリカ衰退の始まりか」

伊藤力司

やや大胆な仮説

毎朝顔洗って鏡をみるとなんとという汚いくそじじいとうんざりするんです。歳をとりました。歯が取れちゃって歯医者に応急処置をしてもらって、硬いもの食べてはだめですよと言われたんだけど、また取れちゃって・・・、大変お見苦しいんですけど、明日歯医者に予約してあって、明後日講演ならよかったんですけど（顔見たいわとの声）・・・。

卒業以来、私は 40 年以上主に国際情勢、国際政治を勉強してきて、それを報道してきた訳ですけども、今日は懐かしいクローバーの皆さんを主体にこういうお話が出来るのは、大変私も喜んでいきます。一番聞いてもらいたい聴衆が今日集まってきておられます。

今日は「イラク戦争後の世界」ということで、これでアメリカの衰退が始まるのではないかというやや大胆な仮説をお話したいと思っております。

昔から、「驕る平家久しからず、盛者必衰のことわりあり」と平家物語に書いてあり、「この世をぞわが世とぞ思う、望月のかけたることなし」と藤原道長が言ったとき、一番強い力があり、一番繁栄しているところから衰退が始まるんですね、これは世界の真理とも言えると思います。

本当はまだ戦争は終わっていない

アメリカが今年 3 月 20 日にイラクに侵攻して、これに世界の世論の多くは反対したんですけど、アメリカはとにかく自分は強いんだ、世界一強い国が目にもものを見せてくれると、3 月 20 日に爆撃を始め、4 月 9 日にサダム・フセイン大統領のイラク政権をわずか 3 週間でやっつけた。これでブッシュ政権としては世界一強い国が勝って、アメリカの覇権が何十年も続くであろうと言わんばかりの態度でした。いわゆる「ユニラテラリズム」、一国主義とか、単独独善主義とか言える訳ですが、一方的に自分が強いんだから、お前ら弱いものはお

私たちの言うことを聞きなさいと言わんばかりの態度が世界の反感を買っている訳です、現に。ところがイラクの戦争は、ご承知のようにサダム・フセインは消えてしまったけれど、毎日のようにアメリカ兵が殺され、戦争に勝ったから兵士はもう帰国できるだろうとみな期待し、家族は待っているのに、テロやゲリラ戦があり、「イラク戦争後の世界」と書いたけれど、本当はまだ戦争は終わっていない、とんでもない見込み違いが起きている。そういうことからすると、やっぱりさすがのアメリカも衰退が始まるかなと言うことは、4月段階からすると皆さんもなるほどなと思われるんじゃないですか。私以外にもそういうアメリカの衰退が始まるのではないかと言う人が世界にもいますけれど、やや大胆な仮説を、私は敢えて皆さんに聞いていただきたいということで、今日のテーマにしました。

ソ連が崩壊した衰退のわだち

私が1975年にパリの特派員の仕事が終わって、日本に帰国したときに、ある経済界の会でヨーロッパの事情について話をしてくれと言われてそこへ行ったとき、やや山勘的であったのですが、ソ連がどうも衰滅するかも知れないという話をしたんですが、実はそれが当たってしまったんです。1975年には全欧安全保障協力条約、ヘルシンキ条約とも言われますが、ヨーロッパ中の国々とアメリカも含めて、NATOとソ連がいわば平和共存して行きましようという宣言をしたが、実はこの時がソ連の絶頂期だったのです。ブレジネフが最盛期のときでした。それは簡単に言いますと、第2次大戦後ヤルタ協定で東西ヨーロッパに分割されていて、いわゆる東欧ですね、ポーランドとかチェコスロバキヤ、ハンガリーがソ連圏に入った。それをアメリカや西側が認めた条約だった。これ以上逆攻勢をかけないという、ソ連の共産主義体制、社会主義体制、ソ連圏を認めるぞという宣言をした。このことはブレジネフやソ連のトップにとっては最も誇らしいことであつたが、丁度アメリカがベトナムから敗退したという時期でもありました。ほかには「デタント」とも言われました。それから僅か15年、1989年にベルリンの壁が壊され、91年にはソ連が崩壊しました。アフガン侵攻がきっかけになったとも言えます。僅か15年であの最も強大を誇ったソ連が衰滅してしまったということがあったのです。

アメリカのイスラム・アラブ文化に対する無知

丁度私は、今度のアメリカのイラクに対する戦争が、驕り高ぶったアメリカがそういう衰退のわだちに入ったきっかけになるのではないかと今感じている訳です。具体的になぜあれだけ強いアメリカ、軍事力で最強のアメリカがそういう衰退の時期を迎えていると私が考えたのは、結局アメリカのイスラム・アラブ文化に対する無知、或いは差別というか、要するに簡単に言えば馬鹿にしているということで、あんなものは時代遅れのどうしようもない奴らだというふうに思っているからこそイラクをやっつけた。そういうイスラム・アラブ文化にたいする軽視が今、連日のようにゲリラ戦が行われて、アメリカの兵隊が毎日のように死んでいる。とにかく5月1日にブッシュ大統領が戦闘が終わった、勝ったぞと言ったあの方がアメリカの戦死者が増えている。なぜイラクの反抗が続いているかということ、サダム・フセインの残党がやっているのだとアメリカは説明しているけれど、私は必ずしもそうではないと思っています。イスラム圏の人たちの反感が非常に強い訳です。これは日本の小泉さんにしても、イギリスのブレア首相にしても「とにかく強いほうにつくのが安心できるワイ、強いものが威張って何が悪い、強いものに反抗するといじめられるし、ろくなことはない」という勝者の論理が政治の世界ではある意味で当然とも言われる現実の動きですけど、世界の大多数の人々はアメリカのやっていることはおかしいんじゃないかと思っています。そういう「力は正義なり」というやり方に対して今、イスラム世界が先頭に立って最も激しく反抗している訳ですけど、こういうアメリカがブッシュ政権のやり方をこのまま改めないと、「驕る平家は久しからず」になりかねない考える所以です。

人間が類人猿から分かれて、500万年たったとか700万年たったとか、今の学問でははっきりしてないが、その長い年月、力の強いものが勝つというのが人類の歴史だった。獣の世界がそうだし、大きく言えばそれは誰もが否定出来ない事実と言わざるを得ない。しかし、人間はやっぱり獣とは違うという、我々が外語の学生の頃習った、パスカルという哲学者が「人間は弱い葦である。しかし考える葦である」と有名な言葉を残しているように、やはり人間には理性というものがあるし、倫理というものがある。それを何千年にわたって培って

きて、そういうものが獣の道と戦う力を我々は持っている訳です

しかし、我が日本国も小泉さんのほうが勝ってしまうという、アメリカについていたほうが良いんだというのが現実の世界としてはあるけれど、その底流には日本人々も、世界のどこの国の人々もやはり理性を持っている人々がいて、どこかおかしいと思いながら現実の政治の世界では流されている部分があり、そういうせめぎ合いが根底にあるとも言えると思います。

イスラム教は最も現実の生活に密着している宗教

イスラム文化、イスラム世界については、実は日本人は最も暗いですし、私もよく分からなかったですけど、その後 40 年ほど国際情勢、国際政治などをやっている、自然にある程度勉強せざるを得なくなり、イスラムのことを学びました。

このレジメにも書いておきましたが、イスラム教というのは、世界の宗教の中で最も現実の生活に密着している宗教でして、イスラム教徒としては五つ守らなければならない行いがあり、それさえ守っていればイスラム教徒だと言え、そういう意味では簡単とも言えるのです。第一が一番難しいことでもあるのですが、アラーの神に絶対帰依するということがあります。アラーの神は唯一の神で創造主であり、世界を、人間を、動物をすべて創り給うた神であるのです。我々もほら！台風があつたり地震があつたりすると、人智の及ばない何かが働いているかもしれないと感じますけれど、つまり一神教というのはユダヤ教から始まって、ユダヤ教のなかからキリスト教が生まれ、その流れの中でイスラム教も出来てきた訳です。

唯一絶対の神をエホバともヤハベともアラーとも言うのですけれど、これは皆同じことで、すべてこの世の中のことは、自分の行いもすべてアラーの神が見通しているんだということです。みなさんの中にはイスラム圏に行ったことがある方はいらっしゃるかどうか？そうですね、インドネシアはイスラム圏です。日本人が一番頭にくるのは、明日何時に会いましょうという、「インシャーラ」と言い、それは「アラーの神がお気に召せば」ということで、つまり明日何時にあなたと会うつもりだけど、アラーの神がだめですよとお決めになったら会えないかもしれませんよということです。日本人は明日 5 時に会いましょうというと必ず

5 時に行くんだけど、イスラム圏の人は得てして 5 時に来ないことは当たり前です。「インシャーラ！」・・・それはアラーの神がお決めになったことで、私は会うつもりだったけど、たまたま寝坊しちゃってとか言うのは当たり前で、その位すべてがアラーの神が自分たちの行いを決めていて、自分たちよりもはるかに高い世界があって、神によって自分たちは動いているんだと考えています。

日本人もよく神様と言いますが、日本人の神様は神頼みの神様でいいんですが、一神教の神様はある意味では怖い神様であるし、絶対の神様であり、宇宙の真理はすべて神が司っているんだと考えていて、だからその神に絶対帰依するということから人生はスタートするということです。

それ以外に、あとは誰が見ても分かることなんです。

一日 5 回礼拝すること、よくメッカの方を向いて跪いて拝んでいる姿がテレビなどに出てきますが、これは誰が見てもこの人はイスラム教徒だとすぐわかります。

或いは、お金のある人は喜捨をなさいと、お金のない人にお金を、物でも良いのですけど、あげなさいと、これはまた目に見えることです。イスラム圏に行くと、よく「バクシーシ、バクシーシ（お恵みを）」と、事実上賄賂を頂戴、袖の下を頂戴と言われることが多いんです。私も、ジャカルタ空港で、パスポートにいちゃもんをつけられ、5 ドル位、入管の人が欲しいということだったのですが、それはお金を貰いつけていて、「お前は日本人で金があるじゃないか、お金のある人はない人にあげるのが当たり前だよ」というふうになっちゃうところもあって、日本人としてはイスラム教徒はいやだなあと一般的に誤解される面もあります。

それからこれは良く知られている「ラマダン」、断食月ですね。一ヶ月間、陽の出ている間、何も食べてはいけない、飲んでも、タバコもいけない。日没以降夜明けまで、つまり何も見えない間はいいのですけど、これは実はユダヤ教やキリスト教にも昔はあったんですね。今、カーニバルというのがあるでしょ、あのお祝いは実はその間食べられなかった、食べなかった人たちが、断食明けで大喜びで食べられるようになった、そのお祝いが、キリスト教徒のなかでカーニバルとして残っている、キリスト教にもユダヤ教にも昔はあったんで

すね。そういう意味では、イスラム教は、ユダヤ教やキリスト教からいろいろ学んだもの、引き継いだものがあります。それを厳格に今守っているのが、イスラム教だけです。

それから、一生に一回でいいからメッカに巡礼すること、これがイスラム教徒が守らなければいけないことです。

あと、4人まで奥さんを持ってよいとか、豚肉を食べてはいけないとかありますが、このムハンマド、日本ではマホメットと言いますが、ほんとはムハンマドでこの人が生きたのが7世紀の初頭で、丁度日本で言えば聖徳太子の頃です。その頃の生活習慣がずっと残っておりまして、やはり豚肉は一番腐りやすいものだった、羊の肉とか駱駝の肉に比べると。だから豚肉は食べないほうが良いという戒律になった。それから、7世紀のアラビヤ半島は大変弱肉強食の世界で、強いものは何人の奥さんを持っても良い、また逆にしょっちゅう戦争があってやもめ・未亡人が非常に多く、未亡人の家庭を救済するために4人まで妻を持ってよい、但し平等に愛さなければいけない、えこひいきがあってはいけないという掟になった。

この7世紀頃の習慣が現在まで残っているというところに我々から見たらちょっとおかしいなというものが確かにあるんです。お酒を飲んではいけないというのは、砂漠の生活に理屈があるんです。日中は50℃、60℃とめちゃくちゃ暑いですが、同じ所で、イラクの砂漠もそうなのですが、夜は零下に下がり、ご機嫌で酔っ払って、砂漠に寝ていると凍死してしまうということが現実にも今でもあるんです。そういうこともあって、飲んではいけないことになっているが、実際はこっそり飲んでる人もいます。イスラム教徒に我々は馴染みがないもんですから、我々にとってイスラムの戒律がおかしなことに見えるわけです。

アラーの教えに従って生きる人生の生き方、生活様式

ムハンマドは洞窟のなかに何晩もこもって瞑想していたときに、神がいろいろ言ったら天啓のようにひらめいた言葉がコーランに書き残された、つまりムハンマドの言った言葉がコーランになっています。預言者というのは、「フォーチュンテラー」の未来を予言する人ではなくて、神の言葉を預かった人という意味です。預言者といわれる人はずいぶんいるんで

す、例えばイエスもそうだし、モーゼもそうですが、ムハンマドはその中で最後の人ということになっています。神の言葉を預かった最後の人だから、それ以降の人にはあり得ない、ですからイスラム教というのは新しく変えることが出来ないというのが原則なんです。つまりムハンマドより以降の預言者は現れない、ムハンマドの言ったことだけが正に金科玉条で、コーランの教えに従っていれば良いということになるんです。

イスラム教徒は今でも増えていて、世界で 12 億とか 13 億といわれ、またイスラム圏の人々は妊娠中絶をしませんから、子供が多いということがあります。宗教というのは神を拝む、信心することも大事だが、実は一番大切なことは生活が決まっていくというか、アラーの教えに従って生きるという人生の生き方、生活様式なんです。

我々日本人は一神教の人から見ると、無神教だと言われるのですが、仏教があるし、神教があるし、いろいろ曖昧な面があるのですが、欧米の人から明治以降、日本人は宗教が無いと言われた歴史を持っているのです。しかし私は必ずしもそうではないと思っています。我々はご飯を食べる時「いただきます」と言います。ごく当たり前に言います。誰でも、子供でもいいです、だいたい子供にお母さんが教えます。ところがこんなことを言うのは世界中広しといえども日本人だけなのです。フランス語ではご飯を食べる時なんと言うかという「ボナペティ」よい食欲をお持ち下さい、よい食欲をお祈りしますと言う意味です。グーダアピタイト、つまり沢山食べなさいよということが、ご飯を食べる時のご挨拶の言葉です。

我々の「いただきます」は何かといったら、この世の中に生きている植物であれ動物であれ、生物の命をいただきますということで、これは当たり前で根源を考えたことはありませんけれど、これは仏教だと思いますが、ヒンズー教でもそうですし、インドから始まった「万物はすべて生きているもので、人間が特別に偉いことはないんだよ」ということを教えている訳です。

今はやりの環境、エコロジー、共生などは実は我々は根源的に持っていたもので、非常に優れたものだと思います。フランス人、アメリカ人、イギリス人とか先進国の人と思われていたが、これらの国では大体キリスト教の影響が強く、「神は人間をお造りになった」・・・

なにかあバラ骨を取ってアダムを作ったんですか、それでアダムの肉を取ってイブを作ったと、人間は生物や動物よりも偉いんだ。だから動物を人間が食べて当然であるということで、それらは人間に奉仕するもので、森や田園を征服することになり、ヨーロッパの近代はそういうことからスタートした。で、やり過ぎたもんだから、ドイツ人は一番先にこれに気づき、環境保護が進んだ。日本は少し遅れているが、特に大量生産、大量消費になって、そういうものを無視し、本来我々が持っていた文化が見えなくなった。とにかくお金儲けには、森林を伐採するのは当たり前、魚も鯨も取り放題の生活習慣になり、近代以降、特に戦後どんどん進んでしまい、環境保護が遅れた訳です。

話は大分横道に逸れましたが、日本人の宗教心は神教、仏教、儒教。儒教というか中国的な物の考え方、生き方ですね、これはキリスト教社会に生活してみて初めて分かったんですけど、彼らは神様が自分たちを見ているという基本的にそういう考え方で、我々は儒教文明圏、中国文明圏というか、箸を使う国、日本と韓国、中国、ベトナム、昔から箸を使う文化圏でした。ヨーロッパは初め手づかみで、包丁になり、フォークになり、洋食器になった。

儒教圏との対比

ともあれ、中国文明圏というか、儒教圏的な考え方では人間は神が造ったものではなくて、人間は人間が造ったもの、お父さんとお母さんがいて、おじいちゃんとおばあちゃんがいて、つまり人間と人間の間をきちっとして行くのが儒教文明の根元にある考え方だと思います。その方が合理的ですよ。神様が自分たちを造ったという意識ではないですから、人間と人間との関係を律して、きちんとして行かなければならない。

ところが、もちろん儒教の教え方の中に弊害も出てきて、お父さんは絶対だとなり、それが金日成は絶対だとなり、我々もこの中には若干名残りのある方もいらっしゃる訳ですけど、天皇陛下の威光、御稜威(みいつ)を世界に示すために醜の御楯となって死ななければいけないと教え込まれた。そういう儒教の忠とか孝を強制されたことによって、儒教とは変なものとの思いながら育ってきたのですけど、よくよく考えてみると人間と人間との関係を正常に持って行かなければならないというのは非常に大切に、本来あるべき姿だと思います。神と

人間との関係よりも、人間と人間との関係のほうが大切であって、フランスに暮らしていた時、どうしてお父さんやお母さんをこんなに粗末にするんだろうなと思うことがよくありました。子供は大金持ちなのに、じいさんばあさんは養老院に入れられて、一年に一遍でも会いに来てくれればいいのに、ちっとも来ないというのが当たり前のようで、だから遺産相続が大変になる、そういう寂しいおじいさんおばあさんとたまに話してみるとなるほどなとつくづく思いました。だんだん日本も、まごまごすると私たちもそうなるのかもしれませんが、まあ、我々の根底には人間と人間との関係、親と子、兄弟の関係が一番元であり、一神教の世界よりいいなと私は思っています。神道というのは天照大神がいてこれはまた我々が強制されたから、いやなにおいがつきまといっているが、これはごく自然にすべて山にも神がいて、太陽は神で、月にも神がいるという、これは人間が一番先に考えたことで、どこの国にもあった、ヨーロッパなんかアミニズム、自然崇拝と言って馬鹿にするのですが、やっぱりそういう我々の人智の及ばないものに対する感謝の気持ちを持つこと、どれだけ近代文明が発達しても地震を止められないというように、神秘的な力に対する崇拝、怖れる気持ちを人間として持つのが動物と違うところだと思います。そこから倫理だとか、良心というものが生まれて来ます。

神の前では人間はすべて平等とのイスラムの教え

イスラムがなぜ力を持っているかというと、神の前では人間はすべて平等であるということをお大切にしているからです。ムハンマドの当時、らい病者、ハンセン病ですね、売春婦、乞食などが多く、人間扱いされなかった、日本だって聖徳太子の時代もそうだったでしょうが、「あなた方も同じアラーの神を信仰する平等な人間ですよ」ということを言った。イエスキリストも数世紀前にそれをやったから、ユダヤ教よりキリスト教のほうが大きな力になった。イスラムのムハンマドが7世紀にアラビア半島でそういう教えを言ったことによって、イスラムを信じるのが如何に彼らの生活にとっていいことだったかということが、7世紀、8世紀、300年位の間にアフリカの北半分位、スペイン・イベリヤ半島、今の中近東から中東アジアまで、そのあと攻めてきたモンゴルがみんなイスラムになっちゃった。そういう力を

持った宗教であるのです。つまり生き方ですね、宗教というとなにか礼拝しないといけないみたいに思われるが、本来的に心のうちの問題ですから、神を信ずるかどうかは見えなくて、見えるのは礼拝する姿とか断食する姿とか、あるいはカトリックで大聖堂でミサをやるとかです。我々はコーラスをしますが、大聖堂に入って行ってミサのコーラスを聞くと本当にいい気持ちになって、ああコーラスというのはこういう所からスタートしたんだなと思います。が、ついでに余計なことを言いますと、無伴奏で歌うのをアカペラと言いますね、「ア」はどこそこで言うことで、「カペラ」は礼拝堂という意味です。大聖堂はオルガンがありますけど、礼拝堂には楽器がないものだから、そこで歌うのをアカペラと言って、そういう所から我々が一生懸命になったコーラスが生まれたんです。

それはそれとして、キリスト教でもイスラム教でもユダヤ教でも、本当の信心は心の内面の問題で、見えるのは礼拝などをする姿です。我々の仏教であり、儒教であり、神道であるものを、融合してなんとなく持っている生き方は、決して非宗教ではなくて、一つの日本人らしい生き方の大切な部分を持っているけれど、欧米の人たち、キリスト教の世界の人たちからはお前たちは宗教心がないのかと言われる。確かに今、葬式やって坊主丸儲けのような姿を見れば、なんだという気になるし、色々なんですけれど、宗教というと信心すると思うけれど、一つの生き方なのです。

そういう生き方があってイスラム世界は12世紀、13世紀、今のバグダッドの所にアッバース朝というのがあってすごく栄えた。アラビアンナイトの頃で、その頃の世界で、中国と並ぶくらい文化水準の高い時代があった。その頃、ヨーロッパは遅れていて、カトリックの坊さんが威張って、何でも法王様の言うことに従わされた。だからガリレオ・ガレリイが合理的な物事の考え方で見ると、太陽が動いているのではなくて、地球が動いていると言ったら、そんなことを言うのは謀反人だから、お前を火あぶりの刑にするぞと脅されて、いやお天道様が動いていますと言って火あぶりにならずに済んだが、それでも地球が動いていますと聞こえないように言ったという有名な話があります。

アラブ文化との接触で始まったヨーロッパの近代

このように中世のヨーロッパは遅れていたが、その頃、イスラム世界は進んでいまして、古代のローマ、ギリシャ、エジプトの文明を維持していたのがイスラム・アラブ文化だったのです。だからその頃の哲学、数学、物理学、天文学は全部アラビア語で書かれ、世界最高峰であった。ヨーロッパは十字軍などをやり、アラブと接触する中で、中世のソルボンヌ、フンボルト、オックスフォードなどこれらは神学校からスタートしたのですが、何を勉強したかというところ、ラテン語、これはカトリックの公式用語だったので国語みたいなものです。その次に勉強したのはアラビア語で、それによってアリストテレスやプラトンの哲学からギリシャの天文学、数学、物理学を勉強して、そこからヨーロッパのルネッサンスが始まった。

キリスト教の方もカトリックに対するプロテスタントの運動があって、そのことによってプロテスタントがプロテスト(抗議)した訳です。法王は威張っていたけれど、実際は腐敗していた法王もいて神父さんは一番偉い人ですから妻帯してはいけないのですけれど、隠し子を持っていたというような話がいっぱい出てきます。これに対してプロテスタントが、キリスト教の覚醒運動に入る訳です。そういう中でヨーロッパでは、神或いはイエスの言葉だけでなく、合理主義を勉強する、合理主義に気づいて行く訳です。合理主義のパスカルもそうだし、彼は非常に信心のあついで、敬虔なキリスト教徒だったが、そのほかニュートンなど合理的な物の考え方、神の世界でない考え方、神の世界をもういっぺん研究して行く合理主義があって、そこから近代をスタートさせ、ジェームス・ワットの機関車などが発明されて、ヨーロッパの近代が生まれて、それが世界をリードして今日に至っている。我々は欧米というとなにか進んでいると子供の頃から教え込まれてきたから、そうかなと思っていたが、実際パリに暮らしてみると、必ずしもそうではないなと私は気がついたということを皆さんにご紹介したかったわけです。

話はだいぶ横道にそれましたが、イスラムとはそれだけの文化を持っている国、人たちです。とにかく今でも増え続け、12億、13億と人口が増えつつあり、アメリカの黒人などもどんどん改宗している、そういう力を持っている宗教であって、そこに帰依して生き方が決まると、我々のように何を信心していいか、何に従っていいか訳分からなくて、人に迷惑をかけるはいけませんよと子供の時に言われたことをまた子供に言って、それで生きているような

ところが無きにしも非ずだけれど、それに比べるとイスラムの方が皆の言う通りやればよいのですから、礼拝をして、断食月には断食をして、お金がある時にはない人に上げて、そのことで自分の人生が充実したと感じられるとすれば、我々よりも或いは幸せなのかも知れないですね。

ブッシュ政権を引っ張るネオコン

そういう力を持った生き方をしている人たちがいるのがイスラム圏、イスラム文化であって、そういう人たちを、アメリカは馬鹿にしている訳ですね。特にネオコンと言われる人たちで、今ブッシュ政権を引っ張っている、タカ派の連中というのはユダヤ系の人ばかりで、だからイスラエル最良なんですね。イスラエルばかり肩を持って、あのシャロンという今のイスラエルの首相は人殺しの大将みたいな人ですが、ブッシュはなんと言ったかという、あれは「平和の使徒」であると…このようなことを言うわけですね。だから、イスラム圏の人たちにしてみれば、頭に来る、イスラムでなくてもひどい奴と思います。そういうネオコンの人たちというのは、人間の善意とか、良心とか、理想とかは信用出来ない。力を持たなければだめである。要するに弱肉強食の法則によって、帝国を作り支配するという、トーマス・ホッブスという17世紀のイギリスの哲学者が言った「絶対主権王制」という考え方を基礎にしている。今ネオコンの人たちは、そうやって力を持って支配したのちに、自由と民主主義を世界に行きわたらせるんだと、だからサダム・フセインをやっつける、やっつけたあとは、イラクは平和な、民主主義の自由な国になると、簡単に言えばそういう言い方をして戦争を正当化している。イラクは大量破壊兵器を持っているから危険だと、もしそれがテロリストの手に渡ったら大変だから先制攻撃をやらねばならないという理屈だったんですけど、これはまあ実は石油資源を取りたいがために、しかもお父さんのブッシュが湾岸戦争で勝ったにも拘らず、大統領に再選出来なかった。それはどうもあの時に、憎っくきフセインをやっつけなかった為じゃないかという、ブッシュ家と周辺の人たちはそういう神話を抱いていて、やっつけなければだめだと言われて、それに乗ってしまったということが多分にあります。それと石油利権、産軍複合体、アメリカは軍事産業がものすごく大きいのですから、

そういう人たちが政権を牛耳るというか、非常に影響力が強い訳です。

それから特にネオコンの人たちの考え方はユダヤ系ですから、イスラエルを助けなければいけない。イスラエルにとって一番危険なのは中近東のアラブ・イスラム世界の中ではイラクであり、前はイラン・イラク戦争の時に、イラクがイランをやっつけるのをけしかけていたが、それが終わると、サダムが反米になりアメリカにとって憎らしいことを言うものですから、サダムをやっつければすべて片が付くと思ったのが運のつきです。そういうイスラムの世界の人たちの感情を逆撫でするようなことを平気でやっているわけです。

イスラムの抵抗

今でもイスラエルを覇権することばかり言っていて、そうするとイスラムの人たちの抵抗感が沸き、実際にテロをやっている人たちはどういう人かという、勿論フセインの残党がいるが、それとイスラム原理主義、これまた言い出すと話は長くなるのですが、イスラム原理主義とは簡単に言いますと、要するにヨーロッパにイスラム諸国はやられた訳ですね。それまでは、イスラムが一番強かったけれど、アジアの西からずうっとヨーロッパ、アフリカに至るまで、それがだんだんやられちゃったというのは、先ほどの「勝者必衰」じゃないけれど、衰退して行って、これはやはりイスラムがヨーロッパの近代合理主義を学ばなかった。ムハンマドの言ったことをやっていればいいんだと7世紀の掟を守っているところに、イスラムの抱えている問題もあるのですが、そういう反省の中から、なぜ我々は支配されているのかと、劣勢を挽回しようという考えです。例えば、今パレスチナという所に、ナチスがユダヤ人殺しをし、酷いことをしたものだから、気の毒だとイギリスが委任統治されていた所へシオニズム運動と言って、あそこへ祖国を作りたいという運動を支援する、いろいろいきさつがあって、これまた話せば2時間でも話しきれないのですが、今日はそれはカットして、2000年あの土地に住んでいなかった人たちに無理に土地を上げちゃって、それをまた力で拡張しようとするのが今のイスラエルのリクード政権、それを支援することがアメリカの外交政策として一番大切である。それと何といたってもあそこは石油地帯ですからそこにアメリカに依存する構造を作りたい、それにはイスラエルという国を利用出来るという

ナショナル・インタレスト(国益)がある訳です。そういう形でやりますから、いつまでたっても平和が来ない。そういう 12 億、13 億のイスラム圏の人たちをいわば敵に回して、いつまで戦いをやる積もりですかという事に今なりつつある訳です。ブッシュ政権ではチェイニー副大統領、ラムズフェルド国防長官、ウォルフオビッツ国防副長官らネオコン・シンパの連中が、「とにかくサダム・フセインさえ打倒しさえすればイラクは民主的国家になる」と言い張って、ブッシュ大統領をイラク開戦に踏み切らせたんです。ブッシュが「イラクは核兵器など大量破壊兵器を隠しているから」と言った開戦理由も、実は口実でしかなかったのです。「これを言えばまとまりやすいから」とウォルフオビッツが口を滑らしたため、真相はばれていたのですが当時は問題になりませんでした。ほとんどのアメリカ人は「核兵器を隠しているサダム・フセインをやっつけろ」と、開戦を支持したのです。

イラクに大量破壊兵器がないことは本当の専門家は分かっていたが、口実を作ってやっつけたら、もうあそこは解放された民主主義国家になりますよと米市民に売り込んで開戦した。実はイラクはイスラム教のシーア派とスンニ派という問題があって、簡単に行かない、非常に複雑な国でありまして、これを統治することはとても簡単なことではない。それを簡単に出来ると思っていた浅はかさがあって、我々も事前におかしいと感じていたし、そういうことを言った学者がアメリカにも沢山いたんですけど、とにかく言うことを聞かずに俺たちは強い、強いものが勝って何が悪い、そういう力で世界をアメリカ覇風にし、あの辺一帯を自由と民主主義の体制にすることがアメリカの国益に叶うんだというやり方だったですね。

本当にイラクに主権が帰るまで抵抗は終わらない

その理屈に乗ってやってみたけど、今ちっとも平和にならない、アメリカは困ちゃって、今度は国連が安保理で改めて多国籍軍を作って、アメリカの兵隊だけじゃ困るから、ほかの国もやって下さい、日本の自衛隊も出して下さい、お金も出して下さいということになって、今度 17 日にはブッシュ大統領も来ますけど、日本にもお金を出してくださいと当然その話になるでしょうし、世界中にもそういうことを言っている。何ととってもアメリカはでっかいし、影響力が強いことから、フランスとかドイツでさえ最近はこれ以上喧嘩をしていると

どれだけ仕返しを受けるか分からないと、ある程度この二、三日、シラクさんもシュレーダーさんもニューヨークに行って、ブッシュと話をし、多少妥協をし、国連安保理決議を採って、多国籍軍を出すという方向にある。その代わり、早くイラクに主権を返しなさい、アメリカの言うとおりの政府じゃだめですよということを言っている訳です。

アメリカは15万の大軍を出し、月々40億ドル経費がかかる、アフガニスタンとイラクで870億ドル位追加予算を出して下さいと議会でブッシュが頼んでいる、世界で出来たら300億ドルか500億ドル位出して下さいと言い始めている、日本が一番狙われているという感じなんです。

それが今の現状ですけど、じゃこれで衰退するかというと、兆しは見えているけど、アメリカは大きい国ですから、まだまだ底力があって、そう簡単ではない。ただ何ととっても世界のリーダーになるには、人間として良心、正義、正しいかどうか考える力がある人たちがいることが望まれており、今のところ獣が来て怖いから逃げる、当たらないようにすりぬける人もいるし、獣を助けたほうが得だよと考える人もいるし、結局長い目で見て、これはイスラム教とか仏教とかキリスト教とかは関係ないですよ、やはり人間の論理性、良心、獣でない人間の心をブッシュさんが納得させられるかどうかです。今、来年大統領の選挙で、ブッシュさんが再選出来るか怪しくなっている、支持率がどんどん下がっている、イラクの戦後処理でちっともうまく行っていない、おかしいじゃないかとの思いをしている。それですごい財政赤字と貿易赤字があって、財政赤字は4500億ドルとも5000億ドルとも言われ、レーガンの時に双子の赤字と大分騒ぎましたが、その後クリントン時代にアメリカの景気が持ち直して、レーガンの減税政策の効果もあって、黒字になったが、その金をぶち込んでいる。湾岸戦争のブッシュのお父さんの頃、日本は100億ドルも税金まで払ってお金を出したのですが、今回はやる時は簡単に勝てると思ったからそんなに言わなかったけれど、実際には金が足りなくなったものだから、お金も出してくれ、兵隊もだしてくれとなった。アメリカ人ばかり死ぬのはかなわないとなった。

国連がアメリカの弾除けになっているとイスラムの人たちは考えています。国連の名で行ってもこのあいだ国連の事務所が爆破されたように、本当にイラクの主権が認められるよう

にならないと、テロ、ゲリラというものは終わらない。仮にサダム・フセインが見つかり殺しても、イラクの安定が保たれるのは非常に難しい。まあ2年も3年も4年もかかるでしょう。アメリカの軍隊が引くのは2年位にはと言ったけど、それもまた怪しくなっている。と言うような具合で、今非常に苦境にあるのは間違いない。

イラク戦争後の世界

ではアメリカはこのまま衰退の道を歩むのかということと必ずしもそうとは言えない。つまりアメリカはなんと言ってもでかい国ですから、カリフォルニアだけでも日本の倍近くあり、全部がその大きさにないけど50州あり、しかも移民で出来た国ですから、日本なんかは外国から3K労働する人たちですらなるべく入れないようにしているけれど、アメリカはまだメキシコ、中南米、アジアなどから行く人を受け入れて、日本のようにまだ少子高齢化になっていませんから、まだ底力があるし、なんと言っても資源大国だし、大統領が変わればまた少し是正をしていくことも大いに考えられるし、そういう意味でたちどころにこれでアメリカが衰退していくということではない。まだアメリカの底力はありますから…。

ただこうやっている内にあと20年とか経つと、中国がやっぱりどんどん大きくなり、インドがそれに続いて。とにかく人口大国ですから、今の調子で中国が経済成長すると、あと20年位すると、アメリカのGDPと匹敵することになるんじゃないかとアメリカの学者もそう言っている。そうなると、正に米中の覇権争いということになりかねない。今のところ中国はアメリカの力も必要としており、アメリカに投資して貰わなければならないし、アメリカの市場に中国の輸出品を売らなければいけない、そういうことで、かなりアメリカに依存する形になっていますから、今米中関係は前よりも良くなっています。ブッシュになってあんな乱暴なことをやっているにも拘らず、中国は今、アメリカとはなるべく協調するようにしてやっている。今度の北朝鮮の問題をみても、米中関係がキイになって動きつつある訳で、これは話は「イラク戦後の世界」という大風呂敷を広げちゃったから、北朝鮮の問題もほんとは時間があればちょこっと触れたいところですけど、ほんとに困ったお国柄でして、大問題です。

ただ、アメリカのタカ派がイラクで失敗したものですから、北朝鮮問題ではあんまり勝手なことは言えなくなって、乱暴なことはやれなくなりつつあります。だから何とか話し合いでと言ったって、北朝鮮もそう簡単に話し合いに応じませんから、まだまだぐじゃぐじゃした関係でややこしいことが続くと思います。大きなこと言うと、あと 20 年位、まあ私生きているかどうか知りませんが、その頃までにやっぱりアメリカは、「大きな望月がだんだん欠けて行く」流れのほうに行くんじゃないかなという予感をしている訳で、私もそこまでは見届けたいと思ってますけど、それこそアラーの神が私に命をくれるかどうか、こればかりは…まあこのようなことで、一応今日の取り敢えずのお話は終わらせて頂きます。